

## 「寛容な社会」

2014年07月10日

日本ジャーナリスト会議とマスコミ九条の会が明治大学を会場にして「安倍政治と平和・原発・基地を考える緊急集会」を開催する予定であった。ところが、明治大学は一週間前になって「学生の安全を第一に考えた」と会場使用を断ってきた。自由な精神を尊ぶ学問の府である大学が拒否したことが批判されている。日本ジャーナリスト会議事務局長の阿部裕氏は「港南区九条の会」のメンバーで、忙しい中、例会に必ず出席している。阿部氏は「（自由な表現活動の）萎縮効果をねらう安倍政権の影響だろうか。大学は、もっと大胆に受け入れるべきではないか」とコメントしている。最近、行政の間で「平和や原発問題」の集会に対し、協賛や会場使用を断るケースが多くなっている。

8日の「東京新聞」の「筆洗」に書かれていたことに驚いた。さいたま市の公民館が「梅雨空に『九条守れ』の女性デモ」という句を「世論が二つに割れる問題で一方の意見だけは載せられない」と掲載を断ったと言う。俳句においても、これほどの自主規制が行き渡っているのかと愕然とした。

数年前、日教組が研修会をホテルで開催しようとしたところ、「街宣車が来て客に迷惑がかかる」ので断られたという事例があった。私も街宣車に襲われた経験がある。教会は付属幼稚園を持っていた。園の近くで風俗営業の店を出したいという人がいた。風俗営業は二百メートル以内の教育関係と病院、医院の承認が必要である。園児の父母は私に承認しないように求め、私も出店反対で、その旨を伝えた。ところが「同和」と名のる人々が街宣車で来て、大音響のスピーカーを用い「承認せよ」と走り回った。町の人々は恐れ、病院、医院は全て承認した。私の園だけが不承認であった。街宣車は二日毎に現れ、十数人が私を取り囲み、承認を迫った。妻は「こんな理不尽に、承認できません」と言った。数人の若者が気色ばんで妻を取り囲んだ。思想右翼は危ないが、経済右翼は暴力事件を起こさないと、弁護士から聞いていたけれども、恐怖を感じたことは事実である。数日後、街宣車が来て「園長先生、おはようございます。ご苦労様です」と優しいスピーカーからの声を聞いた。翌日、園児の父母が見え「園長先生、はんこを押したんですか。店は開いています」と言う。私は「押していません」と答えた。後で、公安当局に迫り、開店を承認させたと聞いた。

「学生の安全を第一に考えた」「客に迷惑がかかる」を理由にして会場使用を断ったところには、見えない圧力に対する恐れがあったからである。その恐れが「平和や原発問題」について、関わりたくないと言う自主規制を生んでいく。戦争中は、国は思い通りに国民を統制していった。異議や反対する者は弾圧、投獄された。拷問を受け、殺された人も少なくない。言葉を押し殺していった戦前、戦中と似てきているのではないか。異議申し立ての言葉を喪失させられる恐怖の時代を招来させてはならない。

一方方向に懐柔された社会は必ず閉塞していく。異なる意見や生き方を認め、他者と切磋琢磨し合うところで、新しいエネルギッシュな文化が生まれてくる。そこでは「寛容」が大事な精神となる。キリスト教界において、異端論争は盛んであった。異端とされたものに真実が内包されていたという発見は数知れない。寛容とは、自分と違うところに真実があるのではないかと想像する心の広さである。多文化を取り込む、懐の深い「寛容な社会」であってほしい。